

# 通信陸上大阪大会

## (7/4・5 ヤンマースタジアム長居)RESULTS

### <男子の部>

3年100m 砂田 12:21 (-1.1)

2年100m 小森 12:11 (-0.2)

1年100m 天野 13:95 (+0.1)

2・3年1500m 白石 4:21:20 <決勝> 4:21:17

1年1500m 勝山 5:21:04

共通3000m 島口 9:00:85 奥村 9:13:39 松本 9:31:61

荒木 9:27:76 川本 9:48:89

<決勝> 島口 9:00:66 **1位** 奥村 9:17:94

共通110mYH 堀本 15:79 (-0.2) 中司 18:43 (-0.3)

<準決勝> 堀本 15:77 (-1.1)

共通4×100mR (砂田・神原・塩見・小森) 45:78

共通走り幅跳び 塩見 5m97 (-1.3) <決勝> 5m98 (-0.6)

共通四種競技 神原 2555点 **1位** 全国大会参加標準記録突破

110H 15:08 (-0.5) 840点 砲丸投 10m46 513点

走高跳 1m65 504点 400m 52秒61 698点

八木 1863点 **8位**

110H 17:10 (-0.2) 614点 砲丸投 8m65 405点

走高跳 1m40 317点 400m 56秒84 523点

### <女子の部>

3年100m 山本光 12:97 (+0.2) <準決勝> 12:92 (+0.1)

<決勝> 12:84 (+0.2) **3位**

2年100m 小澤 13:60 (+0.1) 三瓶 14:01 (+0.4)

1年100m 川村 14:75 (-0.4)

共通200m 畑田 26:22 (+0.3) <準決勝> 26:50 (+0.6)

<決勝> 26:36 (+0.5) **2位**

共通1500m 木下 4:57:31 鈴木 5:13:38 松城 5:08:33

川端麻 5:10:71 金澤 4:59:32 寺井 5:16:03

共通100mJH 亀澤 15:53 (+0.6) 西尾 15:79 (-0.1)

<準決勝> 亀澤 15:65 (-0.2) 西尾 15:62 (-0.4)

共通4×100mR A (亀澤・山本光・西尾・畑田) 50:59

B (小澤・山口あ・川村・畠山) 53:99

C (三瓶・川上・深野・金刺) 54:59

<決勝> A (亀澤・山本光・西尾・畑田) 50:23 2位

共通走り高跳び 沖村 1m45 内村 1m35 畠山 1m35

共通砲丸投げ (2.7kg) 酒井 10m48 村上 10m11

共通四種競技 深野 2102点

100mJH 16:70 (+0.2) 631点 走高跳 1m35 460点

砲丸投 8m45 428点 200m 28:62 (+0.4) 583点

## 通信陸上大阪大会を振り返って

○ 大会2日目。15時20分競技開始、男子四種競技最終種目400m。「注目は5レーンの東雲の神原くん。3種目が終わって1857点でトップ。この400mで53秒91以上で走れば、2500点の参加標準記録を突破します」とアナウンサーが告げる。このレース直前、現地コールを待つ神原の表情は、こちらから声をかけるのがはばかれるほど集中していた。簡単ではないことは十分承知していたが、その思い以上に必ずやりとげられるはずだという思いの方が上回っていた決意の表情であった。神原のこれまでの400mのベストタイムは54秒45。およそ0.6秒の記録更新が必要になる。

最終種目に至るまでも険しい道のりであったはずだ。大会初日の1種目めは110mYH。彼の得意種目である。スターターのピストルが鳴ると桁違いの強さを見せつけ、高さ91.4cmの10台のハードルを次々と越えていく。フィニッシュラインを駆け抜けると場内がどよめいた。速報のデジタルタイマーは15秒08を示していたのだ。正式記録も同じでいきなり840点をゲットしたのだ。ところが、勝負は紙一重であった。「9台目で(抜き足を)引っ掛けなかったら、(110mYH 単独の全国大会参加標準記録突破の)14秒台が出ていたね」と、レース後に声をかけた。彼も同じイメージだったので力強く頷いた。あえてこれ以上は話を続けなかったが、いわゆるハードルの板の上に抜き足が乗っかり動きが止まった状態で、転倒してもおかしくないバランスであった。よく持ちこたえたと胸をなでおろした。続く砲丸投げでも苦戦。1投目9m82、2投目9m34。彼のこの種目のベストは10m46。ピンチである。最終投擲者でもあった神原の最後の投擲。大勝負であったはずだ。渾身の投擲は10mラインを越えた。10m46。ベストタイの記録で何とか望みをつないだのだ。大会2日目の走り高跳びも苦戦した。まずは雨があがったことにお天道様に感謝した。この種目は雨によって記録が大きく左右されるからだ。1m50から跳び始め、55、60と1回目で順調にクリア。続く高さは1m65。彼のベストは1m



70. この高さの記録を残せば、全国出場に大きく前進できると考えていた。1m65、体がバーにふれたものの、何とか1回目でクリア。際どい跳躍であった。1m68にバーがあがった。彼の身長よりも高くなった。第1曲走路のダッグアウトまで移動し祈り続けた。時折、目をそらしてしまいたいという衝動にかられる。結果を見届けることさえ、今の自分には勇気がいるのだ。必死で目の前の試練と戦っている選手に失礼であると思い直し、ひたすら選手を見つけ祈り続けた。1回目、2回目と失敗。ちょうど800mの決勝が始まった。選手が曲走路を過ぎるのを待つ時間帯がある。この時間帯ですら焦れてしまう自分がある。指導者失格である。最後の挑戦、3回目。梅雨空に彼の体が大きく宙を舞った。わずかに体がバーに触れて、バーが揺れながら落下した。審判の赤い旗があがる…。記録は1m65に終わる。苦しい展開となった。「得点計算はしないでおこ。400mで何秒で走れば何点入って2500点を超えるということはいっさい考えないことだ。全身全霊をこめて、今までで最高の走りをするこのみに集中しよう」と声をかけると、彼もきびしい表情で「はい！」と力強く返事をした。

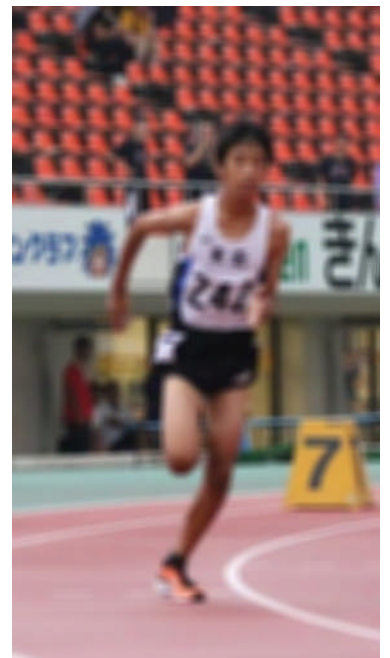
スターターのピストルが鳴った。北の大地の北海道で大輪の花を咲かせたいという思いで（神原）大地はスタートを切った。遠い遠い北海道までの道のりであるが、わずか400mの距離で出場が決まってしまう。リラックスしたきれいなフォームでバックストレートを駆け抜ける。大声援の東雲応援団。アナウンサーが200mの通過タイムを告げる。第2曲走路にはいる。一番苦しいところ。「30秒……、35秒……、残り100mです！」アナウンサーの声も彼の背中を後押しする。最後のホームストレート。「失速するな!!」と念じた。独走状態となった彼の走り、めまぐるしく入れ替わる速報のデジタルタイマーを何度も交互に見比べる。フィニッシュ。『52:61』のデジタル表示に、大スタジアムの観客席から拍手と歓声が降ってきた。「52秒61! 52秒61!! 見事に全国大会参加標準記録を突破した模様です！」また大きな拍手が巻き起こった。神原と固い握手。「おめでとう。立派だったよ。（前に）『52秒台で走れるはずだ』と言ったことは本当だったろ？」すがすがしい満面の表情であった。入部したときは100m15秒くらいの選手。当時の1年生部員の中では100mは遅い方であった。そんな選手が2年後に四種競技で全国大会に出場する。またドラマチックな東雲ストーリーが誕生した。まだ完結していない。続きがまだまだ楽しみである。

- 大会最終日。最後の個人種目、16時10分競技開始、共通男子3000m決勝。前日の予選で9分19秒52までの記録で走った18人の選手がスタートラインに並んだ。前日の予選では島口と最後まで競り合った誠風中学の堀畑選手が8分59秒74、島口が9分00秒85。全国大会参加標準記録は8分59秒00。例年になく涼しい今大会だけに、さらには9分10秒前後のタイムを持つ選手層が厚い陣容だけに複数名の突破者が出る可能性が高い注目のレースとなった。

島口にはいくつかの不安要素があった。5月22日の関西実業団サブイベントで9分01秒22で優勝したときには、今年東雲で全国大会出場が一番近い選手という印象で

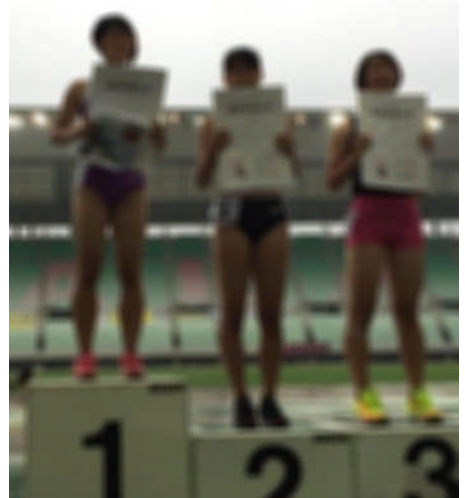
あった。ところが好事魔多し。その直後に足首が痛いと言い出したのである。順調に練習はできなかったが、最低限の練習で誤魔化しながら、何とかこの日を迎えたのである。本音を言えば、通信大会初日の予選で突破させたかった。練習で追いこめていない分、2日続けて質の高いレースをすることはきびしいと感じていたからだ。それでも、中学生のひたむきな心で不可能を可能にしてきたアンビリーバルなレースをこれまでに何度も見て来ている。その可能性に賭けたのである。もうひとりの東雲の決勝進出者、奥村も前日の予選で9分13秒39とベスト記録を更新している。この奥村にも標準記録突破の可能性があると考えていた。

ピストルが鳴った。きれいなスタートである。北海道行きの切符は1枚だけではない。極論すれば、18人全員の切符が用意されているのだ。ペースが速い。200mを32秒でひとかたまりの集団が通過した。400mが66秒。1500m並みのハイペースである。そのあとやや落ち着いて1000mの通過が2分54秒。このままで行くと3000m8分42秒の記録が出る計算になる。島口は集団真ん中よりやや後方。奥村はさらに後であるがこのハイペースである。奥村も2分58秒あたりで通過しているので問題はない。ここでペースが一服したのが前日の予選のレース。同じ過ちを繰り返したくないのは全員がよくわかっていた。島口がするすると前に出て2000mを先頭で通過。6分00秒。残りの1000mを2分59秒以内で通過すれば全国切符が手に入るのだ。島口が苦しそうに顔を左右に振りながら先頭が離れていく。「島口、落ちるな！離れるな！」大声を張り上げる。2400mの通過が7分17秒。この400mが77秒もかかっている。1周72秒で9分ちょうどのペース。致命的な遅れであり、「もはや、これまでか」とあきらめかけた。ラスト1周の鐘が鳴る。島口は5～6番手。先頭の選手とは20m以上の差があった。ラスト300m。島口得意のギヤチェンジ。猛烈なラストスパートである。第3コーナー付近で数人の選手を抜いて、あっという間に置き去りにしていく。「東雲の島口くん、素晴らしいラストスパートです！」とアナウンサーの声にも力が入る。場内に悲鳴と歓声が入り混じる中、最後の直線で先頭にいた堀畑選手と競り合う。2人が倒れこむようにフィニッシュ。1着、島口、9分00秒66。2着に堀畑選手で9分00秒85。3000mを走ってその差がわずかに100分の19秒。次々と選手がやってきてバタバタと倒れていく壮絶なレースとなった。ゴール付近で審判をしていた自分もがっくりと膝をついてしまった。奥村は12着、9分17秒94。迫力のある素晴らしいレースであった。18人の健闘を讃えたい。ここまで選手達が頑張っても、陸上の神様は切符を1枚も渡してくれなかったことになる。



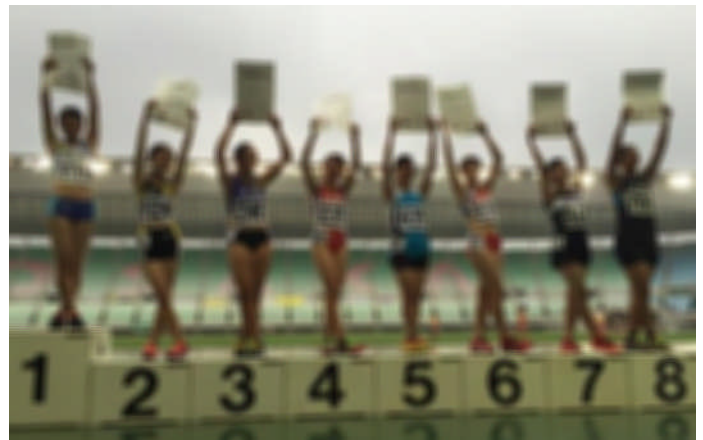
○ 大会初日10時20分競技開始、共通女子200m。全国大会参加標準記録（25秒90）突破を狙う大阪のランキング上位8人の選手が勢揃いした。2レーンに畑田星来（せら）。この数試合で記録が着実な伸びを見せているので、本気で標準記録突破を狙える選手となった。1日で予選、準決勝、決勝の3本のレースをこなすハードなスケジュール。通信大会は言い換えれば全国大会参加標準記録突破のための個人選手権である。この大会に限って言えば、決勝での順位よりも記録を出すことが最優先となるのだ。ゴール付近でスタート前の畑田の動きを祈るような思いで見守った。スターターのピストルが鳴った。カーブのきついインレーンはスピードに乗るのに不利であるが、畑田はそれを感じさせないくらいにぐいぐいと前に出る。カーブの出口ではほぼトップの位置。胸が高鳴った。そこからシードレーンの選手がスピードに乗って前に出る。1着田尻中の坂野選手、24秒95の大会新記録。日本中学陸上のトップクラスの記録である。追い風0.3m。2着の吹田一中の中西選手が25秒79、3着に大教大池田中の寿選手が25秒88。ここまでの3人がいきなり全国大会出場を決めた。4着に咲くやこの花中の島田選手で26秒12。そして畑田が5着で26秒22。わずかであるが自己ベストを更新している。追い風がもう少し吹けば、カーブの緩い外側のレーンであれば、さらには競技開始時間がもう少し遅ければ、いろいろなことが頭を駆け巡ったが、何よりもカーブの出口付近までトップに近かったことを夢実現の拠り所としたい。坂野選手、寿選手が100mに絞るために準決勝以降は棄権を選択。順調に勝ち上がった決勝レースでも畑田は見せ場を作った。5レーンに入った畑田がスターターのピストルで勢い良く前に出る。カーブの出口で決勝でもトップ、そのまま170m付近まで首位をキープ……。フィニッシュラインを真っ先に駆け抜けたのが中西選手で25秒96。2着に入ったのが畑田、26秒36。この順位もあり得るはずと思っていたが、大阪大会200m2位という素晴らしい結果を残したのだ。

場内に懐かしい07年世界陸上大阪大会の表彰セレモニーの音楽が流れる。満面の笑みで表彰状を受け取る畑田。もちろん、全国大会出場を目指しているので、この場面は到達点ではない。そのことは本人もよくわかっているはずだ。それでもほんの少しだけ言わせてください。2年前は通信大会に出場することさえできなかった選手。そんな選手が今や200mを26秒2台で走り、大阪で2位になる選手にまで成長したのだ。表彰セレモニーを見ながら、少し感傷的になってしまった自分がいて、今その自分を必死で戒めているところです。感慨深く彼女を見守るのはまだまだ早い。次の選手権でぜひ標準記録を突破して北の大地で躍動してもらいたい。



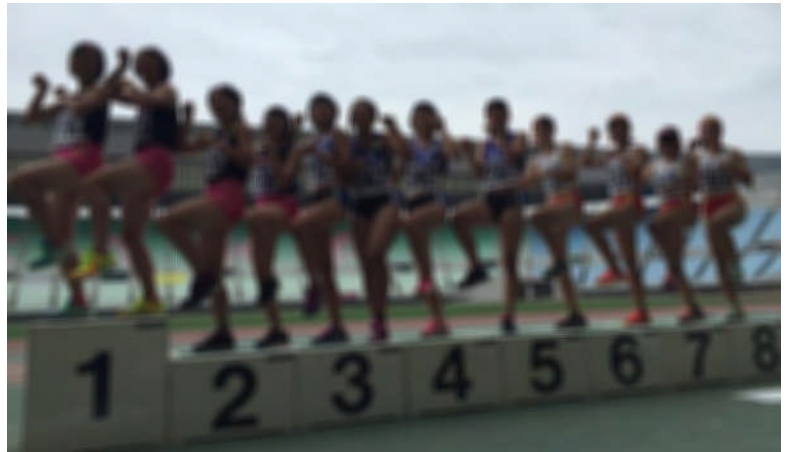


- 大会初日の最後の決勝種目、3年女子100m。実質、大阪中学ナンバーワンのスプリインターを決めるレースが始まる。山本光菜里は予選12秒97、準決勝12秒92と順当に勝ち上がってシードレーンの6レーン。100mと200mの2種目ですでに標準記録を突破している坂野選手が4レーン、200mで標準記録を突破している寿選手が5レーンにいた。他にも大阪中体連強化選手もまだ3人いて、今大会までのランキングで言えば光菜里は決勝進出者の中で8番目の選手となる。それでも、必ず結果を残すだろうという予感があった。もともとは2年前の通信大会1年100mで3位に入り、近畿大会にも出場した力のある選手。いくつかの遠回りがあったものの、3年になって完全復活。今までにないくらいに順調に練習を消化することができたので体も絞れている。さらにはメンタルも桁違いに強くなっている。そして目の輝きが変わった。レーンに入ってスタブロをセットしてスタート練習を繰り返す彼女の動きを見て、持ち前の集中力で必ず結果を出すはずと予感が確信に変わった。スターターのピストルが鳴ると、低い前傾姿勢で猛ダッシュ。中盤までは先頭付近を疾走する。その後さすがに全国切符を手中にした坂野選手、寿選手には先行されるが3着でフィニッシュ。ここの一番で自己ベスト更新の12秒84。追い風0.2m。見事3位入賞を果たしたのだ。雨がやんだ後の表彰セレモニー。ヤンマースタジアム長居の大きな屋根の照明に灯がともる。雨に濡れたタータントラックが鏡のように反射して幻想的な雰囲気になる。決勝レース前には近寄りがたいほど、こわばった表情をしたファイナリスト8人が、表彰台では中学生らしいさわやかな表情であった。ガチンコで戦った仲だけにわかる絆のようなものを感じた。まだまだ彼女らの戦いは続く。もちろん、目指すは夢の頂点、北の大地で輝く日本一になることです。



- 大会2日目ファイナル種目。共通女子4×100m決勝。今年もこの大舞台に東雲ブルーのセパレートユニフォームの選手がいる。この大会で優勝しても、たった1枚しかない全国切符を手にするには足りない。7月末の大阪中学校選手権の優勝チームのみが北海道行きの切符を手にするようになるのだ。ただ決戦の前の大事な前哨戦。この大会の決勝レースで東雲ブルーのセパレートユニフォームが幾多の名勝負を何度も繰り広げてきた歴史と伝統がある。その遺伝子を受け継ぐ亀澤舞、山本光菜里、西尾茉帆、畑田星来の4人の走りに注目した。4レーンに河南、5レーンに東雲、6レーンに青山台、そして7レーンに咲くやこの花。今年度のランキング上位4チームが予選1組と同様に、この決勝レースでもシードレーンに並んだ。スターターの閃光が薄暗くなった競技場でひときわ目立つと8人の第1走者がいっせいにきれいにスタートを切る。歓声の中、バ

トンはバックストレートへ。第2走者のスピード合戦はいつ見ても迫力がある。あっという間に8つのバトンが第2曲走路へ。最後の第4コーナーで「は～い」という第3走者の声が次々こだまする。やがてホームストレートのクライマックスへ。7レーンの咲くやこの花が前に出る。4レーンの河南と6レーンの東雲が競り合いながら追いかける。1位咲くやこの花49秒79、2位東雲、今シーズンベストの50秒23、3位に河南で50秒27。3チームとも3週間後の大決戦を見据え、いくつかの思いが複雑に交錯していたのだが、真剣勝負を終えた安堵感でまたまた中学生らしい笑顔で競技を終えた。最後の表彰セレモニーが終わると3チーム12名の選手が「せ～の」のかけ声で猫のポーズで笑いを誘う。緩やかな時間が流れて大会のフィナーレとなった。大勝負を控えて、重圧を感じる毎日となるかも知れないが、明日や未来にときめき、夢を賭ける一瞬があることが、どれだけ幸せなことであるかを決して忘れてはならない。



- 陸上競技はチャンピオンスポーツ。勝者（チャンピオン）はたったひとりきり、敗者となるその他大勢の選手は数え切れないほどいることになる。喜びや嬉しさの涙の回数よりも、悲しみや悔しさの涙の回数の方がはるかに多くなるのはある意味当然である。それでも何度も何度もテッペン目指して、自分の夢をかたちにするために挑戦し続けるのがアスリートの証ではないかと思う。

期待のハードル陣が惨敗した。男子110mYHの堀本も、女子100mJHの亀澤も西尾もまさかの準決勝敗退となったのだ。涙して悔しさに震える選手を見るのは辛い。辛くて辛くて、どうしようもなく辛い。選手が結果を出せないことは指導者の力不足と自分を戒めている。でもこれで終わりではない、まだ残されたチャンスがある限り、上を見て夢実現を目指す姿勢を貫きたいと強く考えている。『最後まで決してあきらめない』選手とともに二人三脚で意地でもこの言葉を信じ切ってやりきってやると、もう一度決意を固めた。男子走り幅跳びの塩見も決勝ラウンドに進んだものの、ベスト8に残れず敗退。男子四種競技の八木は8位入賞を果たしたのだが、走り高跳びでは不甲斐ない跳躍が続き、自分の力を出し切れなかったとは言えない。女子走り高跳びの沖村や女子1500mの木下、男子1500mの白石も惜しくも8位入賞を逃す結果となった。女子四種競技の深野も走り高跳びで自己記録の1m40を跳んでいれば表彰台に上がったはずだ。強く悔しさを噛みしめたのが2年男子100mに出場した小森。記録上位者で固められた1組に出場しながら、リキんで本来のリズムで接地できずにまさかの予選敗退。

2年女子100mに出場した小澤も準決勝にすら進めなかったことには納得いかなかったはずだ。大切なのはここからどうするかだ。～『負けられないことは立派、負けたことに負けられないことはなお立派』

- 通信大会そのものに出場できなかった人もいる。この大会に参加するためには参加標準記録突破が条件となるからだ。くわえて、今年から競技場での早朝練習が出場選手にみに限られることになった。1年生や多くの選手に長居の大スタジアムのピッチに、練習でもいいから立たせてやりたいという思いが強かったのだが、この数年早朝練習の混雑ぶりがあまりにもひどく、混雑緩和と衝突事故防止のために断腸の思いでの決断となったのだ。東雲の選手は用器具やブラカードの補助員の仕事をさせてもらっている。ブラカードはスタート時に観客席に向かって『スタートです。お静かにお願いします』の看板を高く掲げる仕事である。注目の決勝レースで、選手に背中を向けることになるが、それでも恵まれた補助員の仕事である。決勝レース前、集中力を高める選手の雰囲気やその空気を肌で身近に感じることができるからだ。また、標準記録を突破したときの歓声や拍手が上から降り注いで、お腹に響く迫力にさぞかし感動したことでしょう。この補助員の役割も大会を盛り上げる大事な仕事であるが、いつかは自分が決勝レースで輝いてやるという気持ちを強く持ち続けることを忘れてはいけない。
- 夏の全国大会はジュニアオリンピックのように、いつでもその参加標準記録を突破すればいいというものではない。今回の通信大会と、3週間後に控えた選手権大会の2つの指定大会だけで突破しなければならないのだ。暑さがきびしい時、風が強く吹き荒れる時、雨が激しく降る時、これまでにさまざまな悪条件が有力選手の夢を阻んできた場面を何度も見ている。選手がこんなにも頑張っているのに、結果が出ない場面を見ると、陸上の神様が情け容赦ないことに複雑な気持ちになる。今大会は今までに記憶がないくらい涼しい通信大会となった。クラウチングスタートでタータントラックに熱さで両手をつくことができないので、氷水の入ったバケツに手を突っこんでいる選手たちの風景もなかった。いつも耳が痛くなると感じるくらいのにぎやかな蝉の声も聞こえない。中長種目は別として、小雨まじりの低温の気象条件下のせいか、例年より大阪全体の標準記録突破者が少なかったのである。今まで余裕で標準記録を突破した選手が、今大会突破できずに終わってしまった有力選手が何人もいる。でもここで落胆しているようではダメである。例えば、砂漠で迷ってしまったとする。水筒には水が半分残っている。このときに、「もう水が半分しか残っていない」と考えるのか、「まだ水が半分も残っている」と考えるのか…。後者の考え方ができる人が、困難や試練を乗り越え夢を実現できる人となる。陸上の神様は決してきまぐれではない。陸上の神様は乗り越えられる試練しか与えない。

